

【対談】

町田康+朝吹真理子

わけのわからないうを讀む

若手小説家や批評家、文芸編集者らによる読書会「シミローク」が公開イベントを行います。ホスト・ゲストに課題図書を選んでもらい、お客さんといっしょに語り合うというもの。

第1回ゲストの町田さんは安部公房「無関係な死」「なわ」を、ホストの朝吹さんは『宇治拾遺物語』より9篇を選書。ここではイベントに先立ち、ふたりが課題図書をどう読んだかを語ってもらいました。

※イベントの詳細は、対談末尾をご覧ください。

町田 今月はめちゃくちゃ忙しいんです。

朝吹 新しい二本を二冊も出されたばかりですもんね。

町田 いや、焼きものをするために美濃に行つて、茶碗つくつたり。

朝吹 焼きもの？（笑）昔からお好きなんですか？

町田 ぜんぜん。もう偶然です。それから読まなきゃいけない本もめちゃくちゃ多くて。でも朝吹さんが選んでくれた『宇治拾遺物語』はたのしんで読めました。

朝吹 わあい、嬉しい。気に入っていただけと思いましたが！

町田 これを選んだのはなんでだったんですか？

朝吹 町田さんの小説と近いものを感じたんです。中世や近世には、因果律が抜け落ちている話がありますよね。人間が生きていることの無意味さとか滑稽さを、フエティッシュな感情や情緒にまみれずに、そのまま書くのがおもしろくて。町田さんの作品を、もし中世や近世のひとたちが読んだら「こつこつを求めていたんだ」と言っへんやないかと思っただんです。

町田 まったくそのとおりのおもしろさを感じました。ほくは「わけのわからなさ」とか「内面のなさ」というのがすごく好きなんです。簡単に言ってしまうと、「なんでそんなことするの？」ってことですよね。

朝吹 そう、行動の意味がわからない。

町田 中世のひとだからか離れていて理解できないのかという、そんなことはない。

*

朝吹 この放屁の話（巻三の二「藤大納言忠家、物いふ女放屁の事」）なんて、こまやかな書きぶりだけれど、書かれてくる出来事は、とんちんかんで。色事の最中に女の放屁を目の当たりにして出家しようと思った忠家が、思い直して、そんなことで出家しようと思った自分の心の動きに憤然とする。もつ、ここからなにを讀みとったらしいのか。

町田 まったくわかりません。

朝吹 そこが讀みものとして心地よくて。でもするのはいは放屁なんて絶対おもしろいに決まってる（笑）。

町田 放屁で出家する——出家から見てもふざけてるし、放屁から見てもふざけてる（笑）。出家を決意してちょっと歩いて「やめよう」と思うところ、これって、すごく人間ですよね。ほくの小説を読んだひに、「特別に秀った人間を書いている」とよく言われるんですけど、ほく自身はそんなつもりはなくて、人間の心の動きをふつと写すと、こつなっていると思っんです。

朝吹 因果律の抜け落ちている様と云うと、「伴大納言の事」（巻一の四）と、「出雲寺別当、父の鯨になるたるを知りながら殺して食ふ事」（巻三の八）があります。

町田 両方とも予言的な夢の話ですね。

朝吹 「伴大納言」は、いずれ応天門を放火することになる予兆をしるした段ですけど、理由や経緯は抜け落ちて、結果だけがあるわけですね。ひじょうに不気味で忘れがたい書き方です。これは典型的ですけど、因果律が抜け落ちているときの説明として、中近世のひとは、夢や怪異を使っんです。

町田 中世には、夢とか怪異がもつとふつものものとしてあつたんじゃないですか。

朝吹 地続きであつたと。因果で説明できないことって、たぶん中世のひにしても、われわれにしても、怖いことですよね。寄る辺がないわけだから、それを理解可能なかたちに落としこむために、夢とか怪異を、むりやり使っている気がするんです。

町田 図式に入れちゃつと。

朝吹 神隠しにしても、実際は間引きしたのだとしても、神隠しという嘘が共同体のなかで共有され、真として機能する。アリバイ工作としての夢や怪異が、現代のわれわれが読んだときに、おもしろくも思います。でも、新作『人間小唄』は夢や怪異を使わなくて、因果律が抜け落ちたものを書いていきますけれど、どうしてなんでしょう？

町田 誠実に話を進めていくと、どうしてもそつなつてしまふ。落としてこむ作業というのは、かたを整理して、心あたまる方向にもつていく作業だと思っんです。因果律とか、夢や怪異じゃなくても、愛とか優しさでもいい（笑）。鯨の話で言つと、親父が生まれ変わったという鯨を食べてしまつたわけですが、その結果「男が減びる」と書くところ、一応、納得がいくでしょう。

朝吹 話として受け入れやすくなりますよね。

町田 そこに至る道筋はやつぱりおかしい。ふつと、そんな鯨は食べないだろう！（笑）

朝吹 夢にお父さんが出てきて、鯨になってしまつたので川に放してくれと頼む。目が醒めて、そのことをずっと妻に語っていたのに、実際に何日かあつと、夢のとおり鯨が出てきたら、上臈という男はもつそんなことを忘れちゃっているんですよ。

町田 あれ、忘れてないですよな？

朝吹 「思ひもあへず」で、解釈がわかるんです。大きな

鯨を見たとき「上臈思ひもあへず」というのが、鯨はお父さんだつてわかつていたのに、食欲に負けて、「そんなの知りませんよ」って素振りをしたのか……。

町田 「魚の大にたのしげなるにふけり」というのは、うれしくなつたつてことでしょう。

朝吹 そう解釈をするか、すっかり失念してしまっているところから「思ひもあへず」の訳が変わる。『日本古典文学全集』だと、「思ひもつかず」と訳しています。これだと「上臈は忘れていた」ことになりまふよね。でも、話としておもしろいのは……。

町田 これは完全にわかつていて、「夢は、だつて夢じゃん、それはそれ！」ということだと思っ。こつこつと多いじゃないですか。「大丈夫大丈夫、お父さんもきつとうれしいよ」つて（笑）。

*

朝吹 『宇治拾遺』は、わからないことを、わかるつて書いていないのが好きです。でも「わからないことをわからなくして書く」のは、とても難しいですよね。

町田 ほくは『人間小唄』を書いているときに、そのへん開眼したんです。読んでいる人に「なんで？」と言わせないし、自分にも聞かないで、ぶつ飛んだまま押し進め。

朝吹 いままでの町田さんの作品も、因果律が抜け落ちて、嘘と真がぐるぐる反転しつづけて、何が嘘で何が真からなくなつて、最終的には、自分の死体を背負つていようという状態に至るまで、因果律の抜け落ちた世界をささえるためのわけのわからないものができましたよね。くにくにくくであるとか、謎を謎としておくところのできる、なんらかの媒介があつたと思います。でも、『人間小唄』は無媒介に、底の抜けている世界であると。無媒介にわからなさが讀み手にやつてきます。世界がわからないまま、次の行のわからなさに繋がる体験を、最初から最後までして……。すこい。

町田 でも、次の行はわかるでしょう。

朝吹 そう。読み終わつて本を閉じたときに、わからないことをわからないままわかる？（笑）わからない感覚だけをぱきりと内臓でうけとめる。「どつとした右がお腹にはいつてくる。わからな」といふ石を呑み込むことができる感じがするんです。そういう読書ができるのは、不気味で、しあわせです。

町田 それはやつぱり感情だと思っ。ほく自身が、一〇代からずつともつていた感情なんです。因果律とか、説明のつくものと、ここの前提で考えよう」ととされている決まりに

して、「絶対に嘘だ」というかたくなな思いこみがあって。「いついことです」と説明されると、むらむらと腹が立つんです。だからそれを、きっちり外していつているんだと思います。

＊

朝吹 町田さんが「無関係な死」を選んだとうかがったとき、意外な気がしたんですよ。

町田 じつは安部公房が好きで、中高生のときによく読んでいたんです。それを完全に忘れていた（笑）。「影響を受けた作家は誰ですか？」とか訊かれるでしょう。筒井康隆さんとかいろいろ挙げていたんですけれど……。

朝吹 だって聞いたことがなかったもの。

町田 今回、短篇を選ぶときに、井伏鱒二とか、梅崎春生とかを考えたんです。でも、なんか似た感じがして。「絶対にこれ」というのが思い浮かばなかったんです。そうしたら安部公房を思い出した。

朝吹 安部公房は、いま挙げた流れのなかでいい具合に浮いていますよね。

町田 この浮き具合をやったかどうかと思ったわけですが、短篇を再読して思ったのは、あんまおもしろくない（笑）。小説としてあまりに論理的すぎる。

朝吹 ああ、やっぱり。同じ印象です。

町田 かたちがわかってしまうと、小説を読むというよりは、どういう考えなのかを読んでいる感じがする。ただ、どこどこに気持ちいい言葉がある。安部公房は長篇のほうがいいですね。

朝吹 『カンガルー・ノート』の、足からカイル大根が生えるとか、意味不明なところ好きだなと思うんです。反対に、「S・カルマ氏の犯罪」とかは、ちょっと忌避したくなる。安部公房も情緒に寄りかからないのは好きですが、いかんせん論理的な説明が多すぎて。

町田 正確に書かないと気が済まないんでしょうね。

朝吹 設計図を説明書きだけで読んでいる感じ（笑）。かえって混乱するから図にしてよ、って思います。乱暴にあらずじを説明すると、ある日、Aなにかがアパートの自室に戻る、見知らぬ他人の死体が横たわっている。動転したAは通報することもできずに、死体を観察したり、自分が疑われるんじゃないかと怯えたりするうちに、泥沼にはまっていますよね。

町田 これは論理的に順を追ってやっているんです。死体を見つけて、なぜAがすぐ警察に行かなかったのかの説明が

延々あり、今度はどういつ死体かを説明する。

朝吹 で、死臭が漂ってきて、となるんですね。

町田 Aには身に覚えがない。ところが、徐々に自分と死体が無関係であることが不確実に揺らいでくるんですね。それで、だんだんと罪に追いつまってくる。短篇集全体に言えることですが、自分自身の閉じた中の世界に対して、外の世界はつねに不穏な空気に満ちている。貧しかったり、食糧不足とは書いてないんだけどそんな様子があったり、外の世界が自分を追いつめる気配がずっとあって、その気配との戦いというのが話の前提としてあるわけですね。そのなかでも「無関係な死」を選んだのは、それがいちばん曖昧なかつちで出ていたから。

朝吹 不穏が曖昧。

町田 『粗忽長屋』の「死んでるのはおれだけど、死んでるおれを背負ってるおれは誰だ？」というのが、「無関係な死」にも当てはまる。「この死体は自分である」と読むこともできるわけで。あるいは、もっと抽象的な「死」というものをこのAが妄想として意識しているだけで、追いつまていくという狂気とも読める。Aはなんとかして、自分が論理的に死を回避しようとしているんだけど、失敗していつ。

朝吹 ほとんど死と関係していく。たしかに貧しさが、部屋の写真から伝わって来ますけれど、すごく気になったのは、「ついでにベッドの下もたしかめてみる。ほうろう引きの便器の白い肌が、ぼんやり光って見えていた」という箇所。どういつ状態の家なのかしら。

町田 トイレが各戸にないか、アパート自体にないとか。これが書かれたのは昭和三十六年だから、戦後すぐに建ったような建築だとありえるんじゃないですか。

朝吹 そつか。この便器が引っかかっていたんです。無理矢理ですけれど、これを違うかたちで読もうとしたときに、じつは死体のほうが部屋の主で、トイレまっけずに簡易便器を使うひとなのかと。

町田 寝たきりみたいなひとがいて。

朝吹 そつ。死体の描写に「小皺だらけの首筋」で、「血の気がなくなった、しなびた耳」とあって、これは死んでからだいぶ経っているんじゃないかと、そう描写される状態の人をAが殺したとも読めるかもしれないって。だから、Aは死から無関係になろうと、知らない振りをしているだけ。

町田 「客が来ていた」の客はAのほうだったという。

朝吹 ふつうに読むと、論理的な、家の設計図的な描写がくどいくらいに続きますよね。安部公房がどうしてそれを書

いたのかをヒントに、違うかたちでAと死体の関係を結ぼうとすると、じつは死体の家にいたんじゃないかなって思ったり。

＊

朝吹 「無関係な死」の「西陽をうけて、ミカン色に輝いている」という表現が、印象に残ったんです。情緒に寄りかからずに論理だけで、ト書きのように伝えたいことを率直に書いていくなかで、「ミカン色」という言葉が、彼が生きてきた何年間かの生の部分としてぽつと出ちゃう。

町田 どうも「ミカン色」に輝いているからね、よろしく！って演出されている感じがするんだよね。

朝吹 「そんな照明当てようよ」と（笑）。

町田 ふつう小説には、照明係なんていないことになるわけでしょう。小説のなかの世界だけを、「無関係な死」であれば、アパートの一室のことだけを書く。でも安部公房は、舞台裏に説明している感じがする。

朝吹 読み手は楽しむために、照明や音響、大道具や小道具を兼ねて小屋をつくらなきゃいけないわけですよね。普段読むときは、その世界に入る感じで、ずっと読むけど。

町田 「世界がセツトかもしれない」なんて疑わないよね。

朝吹 不思議なのが、主人公のAと書き手の視点の距離感なんです。「魚の図案をちらした、枯葉色の安物のカーテン」という文にも、「安物の」と価値判断が入っている。なにに向かつて提示されているのがわからないんです。もちろん読者が喚起するためなんだけれど、Aがそれとなく感じていたのが、箱庭をじつと見ている書き手が感じているのか。

町田 なにしろAですからね。

朝吹 しかも「Aなにかし」。誰でもない感じで、さらにあやしい。

町田 「無関係な死」は、死というものが無関係では絶対あり得ないという戦略があったと思うんです。「その死が、誰の死なのかを確定できないでし」。なんであなたがたと無縁と言えるわけ」って。

朝吹 わたしは、死という概念が、彼とは無縁のものであったはずなのに、死因という「因」によって、嫌でも関係がずぶずぶ深くなってしまからこそ、「無関係な死」というタイトルなのかと思っていました。逆説的に、関係が密になっ

ていくことが、とても不条理な感じがしたんです。

町田 そつそつ、不条理。予期していなかったことだし、まったく心当たりのないことなのに、自分が背負い込まねばな

らない。だから必死になって、自分と無関係なことにしようとするわけでしょう。「その必要はないのに、しなげばいけない」というのは不条理きまりない。けれど、死を無関係にしようすることに後ろめたさを感じたりもする。心理的な揺れもある。やればやるほど自分が死んでいくわけですよね。

朝吹 しかも不思議なのは、血痕の付いた敷物を真っ白になるまで洗うのだけれど、いったい何時間経っているのか。

町田 時間の追詰めかたも論理的で、日が暮れるまでに「やらなきゃ」とはじまって、その後も帰宅する人の足音とかいろんな角度から執拗に描く。すっかり日が沈んで灯りをつけた瞬間、それまで止まっていると思っていた時間が急にどわあって進む。ただ、死体だけが止まっている。そのやりかたも、理屈っぽいというか。

朝吹 がっちり組み上げている。

町田 時間が過ぎていくことやタイムリミットも、結局は死に繋がる。これは五〇代のひとが読むのと、二〇代のひとが読むのでは印象が違うかもね。もう先が見えているひとと、またかなりあるひと（笑）。これを選んだのは、ほかとは違つて重い、うつうつしいから。

朝吹 不穏だし、こつちのほうがわからない不条理さのなかにありますよね。

町田 安部公房は一時期、共産党に入っていたりして、価値とか生産とかの気配がありますよね。工場の話とか食料の話あど官憲に追詰められる話とか、精神病院から逃げる話も多い。そのなかで「無関係な死」は身体的であり、人間の有限の命をじめつとしたところを考えているところがあるんですね。

＊

町田 「無関係な死」も、滑稽と言えは滑稽ですよ。

朝吹 死体を動かさそうとして、まず自分の体を使つてためし

てみたとか（笑）。

町田 秒数測つて練習したりしてね。それから、必死で血を拭き取るんだけれど、あどで血痕こそが自分の無罪を証明するものだと思つて、「しまったあー」って（笑）。

朝吹 それなのに、この書きかたは論理の提示だから笑つ余地がない。読んだあとに引いて考えろ、すくくおもしろい話なのに！

町田 書きようによってはね。

朝吹 不穏さと、責め立てられたり見られたりしている感覚の苦しさかひたひたとあつて。

『桐島、部活やめるってよ』で
衝撃的デビュー。
平成生まれの大型新人
待望の第2作!!

チア男子!!

感動の
スポーツ
青春小説

朝井リョウ

人を応援することで主役になれる、
世界で唯一のスポーツがある——。
柔道をやめた晴希と一馬は、
男子のみの新チームで大学
チアリーディング界に旋風を起こす!

好評発売中●定価1,575円



ハルたちと一緒に
笑って泣いて
飛び下りよう!!
朝井リョウ

(あさいりょう) ●1989年生まれ。
岐阜県出身。早稲田大学文化構想
学部在学中。『桐島、部活やめるってよ』
で、第22回小説すばる新人賞を受賞し
デビュー。12万部を超えるベストセラー
となり話題を呼ぶ。

★朝井リョウ × 早大男子チア“焼肉座談会”公開!

試し読みもできます。▶「チア男子!!」特設サイト

チア男子 集英社 検索 <http://www.shueisha.co.jp/cheer-boy/>

著者写真/©SAYURI SUZUKI イラスト/曾根愛

〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

集英社

町田 なんで笑えないんでしょうか。死体をあつつかう話だと、土方落語の「算段の平兵衛」というのがあるんですよ。

朝吹 あ、なんとなく聞いたことがあります。

町田 庄屋が、妻に叱られるのが嫌になって、妻を平兵衛のところへ嫁にやるんです。平兵衛は遊んでばかりで働かないから、お金に行き詰まるんですね。彼は算段という、無理なことを考えて円滑にする相談屋みたいなことをしているんですが、どうしようかと考える。そこで庄屋を呼んで、嫁に色仕掛けをさせる。庄屋をいい気にさせたところに現れて、おとして金を強請るんですが、コンッって叩いたら庄屋は死んじゃった。このままじゃ殺人罪になってしまうので、死体を庄屋の家に運ぶ。戸の前で、庄屋の声色を使つて開けてくれと言つと、庄屋の妻は「また女のところに行つてたんでしょ」と怒っている。平兵衛は「開けてくれないんだったら、もう首吊つて死ぬ」と言つて、庄屋の死体を首吊らす。こんどは妻が困り果てて、平兵衛のところへ相談に行くものだから、つぎはその死体を隣村のトナリに押しつけて……、と死体が、何度も何度も殺される。

朝吹 ひどい話(笑)。じつは目撃者がいたんでしたっけ?

町田 そう、最後は粗雑に終わるんですけど。技術に長けた落語家が演じたら、笑える話になると思うんですが、それを安部公房が書くとなると……。

朝吹 ものすごく不機嫌になりそう(笑)。じめつとして、タンスの奥の、三年くらい着ていなかったタワンジャケットのにおいというか。

町田 時代性もあると思うんです。これが書かれた昭和三十一年代は、やっぱりまだ豊かじゃない、苦しい時代だから。

朝吹 「なわ」を読んでも、そが気になるのに、「無関係な死」だと、部屋の中に閉じ込められているときの逼迫感がある。かつ、笑いという横から差し込む視線ももてない。素朴に不思議なのは、なぜ笑いの隙を与えなかったのか?

町田 でも安部公房って、そういう作家ですよ。絶対に隙をつくらない。緻密な論理で笑えるパターンもあるわけだけれど、「無関係な死」は笑いからもっとも遠い(笑)。

朝吹 だから、町田さんが選んだのが意外だったんです。

町田 どこが好きだったかと言つと、安部公房の小説に描かれる風景なんです。

朝吹 ミカンのもの?

町田 この感じは思い浮かべていなかったけれど、貧乏臭さではなく、モダンな感じがしていいんです。安部公房の描く風景とか部屋、『燃えつきた地図』に出てくる団地は、直線的と言つのか、かっこよかったんです。それが好きで読んでいた部分もあった。だから街を歩いていて、いい感じのアバ

ートを見ると、「安部公房の小説に出てきそうだな」と思っています。

朝吹 そうなんだ。「赤い蔭」はモダンな感じがするの、「無関係な死」は……。「ミカン色に輝いている」が貧乏らしいというところではないんです。単品単品で要求してくる感じが、嘘くさいのかな。描かれた家具の後ろを見たら、じつは張りぼてだったというふうな気がするの。

町田 小説の世界って歪むじゃないですか。ひとと物の関係がどうしてもあるから。あるひとのキャラクターを表現すると思つたら、そのひとが男子学生なのか、働いている女性なのかで部屋も変わるし、そこに置いてあるお気に入りの物を描きたいですよね。でも、その描きかたってある程度は嘘になつてしまふ。安部公房は、逆にめっちゃ正確に書いてるから、嫌な気持ちになるんじゃないですか。

朝吹 要求が等価にあるのが怖いんです。遠近感がなくて、ぜんぶが近くにある。物体、物体、物体……。

町田 それはもう安部公房の世界じゃないですか(笑)。不気味で。

朝吹 不機嫌感じがする。

町田 それが安部公房ですよ。

朝吹 はい(笑)。

白熱の対談の続きは、 「早稲田文学 増刊π」と シミログ公開読書会で!

●イベント詳細

【プログラム】第一部 町田康 + 朝吹真理子のトーク

第二部 問宮緑、坂上秋成らと行うディスカッション

【日時】2010年11月20日(土)午後3時~6時

【会場】3331 Arts Chiyoda (<http://www.3331.jp/>)

【ご予約】シミログ・ブログ (<http://shimilogue.blogspot.com/>)

※課題図書の詳細についても、上記ブログの説明をお読みください。